

# コックさん、板さん御用達のまち

——合羽橋道具街

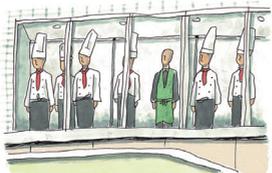
観光客で年中ごった返す浅草雷門から西へ7〜8分歩くと、ユニークな商店街が現れます。巨大な業務用のやかんや鍋、数えきれない種類の包丁、色とりどりのノレンや提灯、店舗用のイスやテーブルetc。飲食店で使われる業務用品ばかり扱う店が立ち並ぶ「かつば橋道具街通り」です。

800mほどの通りと周辺に、食のプロ御用達の店約170店舗がズラリ。業務用とはいえ小売店のため、包丁やロウ細工の食品サンプルなど、モノづくり日本ならではの土産を採す外国人観光客の姿も目立ちます。

商店街の起源は大正初期。現在はメインストリートになっている場所に堀があり、兩岸に数軒の古道具商が店を開いたのが始まりだとか。「かつば橋」の名は、川に架かっていた「合羽橋」に由来します。

その後菓子道具の店がしだいに増え、空襲で全焼したものの、戦後は日本一の道具街へと成長して今に至ります。

玩具の蔵前。人形の浅草橋。衣料品の馬喰町。周辺にいろんな問屋街もあって、下町散歩にオススメ。



店舗の2階窓辺に並ぶコックさんのマネキン。さながら六地藏だ



# なぜ山深い里が天領に？

## 飛騨高山・上三之町

名古屋からJR高山本線の特急で北上すること約2時間半、北アルプスを望む飛騨の高山へやってきました。

内外からの観光客でにぎわう上三之町、上二之町などは、国の重要伝統的建造物群保存地区。江戸末期から明治にかけて建てられた中2階の町家が連なるまち並みは整然として美しく、はるか昔へタイムスリップした気分です。

かつて飛騨高山藩の城下町だったまちですが、藩政により商業が重視されたため、町人地が武家地より広く、今に残る140軒以上の町家から往時の繁栄ぶりがしのべられます。

ところでこのまちは、元禄時代に藩主金森氏が東北の出羽国へ転封となり、幕府直轄の天領に。天領時代の代官屋敷、高山陣屋も現存しています。

こんな山深い場所がなぜと不思議ですが、狙いは資源確保でした。当時の建物は木造。暖房や調理から刀剣用の製鉄まで、生活と産業の根幹を木と木炭が支えた時代です。豊富な森林資源を抱えた飛騨地方を、幕府は手中に収めたかったわけですね。



昔懐かしい職人の店や個人商店が立ち並ぶ重要伝統的建造物保存地区

